The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響 : 暹羅派遣経済使節から戦時猛獣処分へ
Author(s)	橋本, 順光
Citation	日本研究論集. 2016, 14, p. 159-181
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90015
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響
—暹羅派遣経済使節から戦時猛獣処分へ—
A Black Leopard Escape from the Ueno Zoo (1936)
-Yasukawa's Economic Mission and the Slaughter of Animals in Wartime

橋本順光*

大阪大学大学院文学研究科(比較文学専修)准教授

要旨

上野動物園の黒豹脱走事件は、当時から1936年の三大事件にも数えられ、重要な影響を及ぼした。黒豹は、安川雄之助を団長とする暹羅派遣経済使節が1936年に持ち帰り、上野動物園に寄贈したものであり、近代におけるシャムからの動物招来の系譜に連なる。事実、この事件は、前年にシャムから寄贈された象の花子の戦時中における殺処分の遠因ともなった。それは軍部や行政の指示というよりも、関東大震災に際して発生した流言と猛獣処分の延長にあり、1920年代から流行していた南洋一郎の作品による猛獣狩りへの憧憬と不安とが不安をさらに醸成した可能性が考えられる。

キーワード：南洋一郎、『吼える密林』、フランク・バック、小林信彦

Abstract

In 1936 Yasukawa's Economic Mission came back from Siam with a black leopard. The leopard, donated to the Ueno zoo, escaped in the same year.

---

* HASHIMOTO Yorimitsu, Associate Professor, Osaka University

e-mail：yorimitsuhashimoto@gmail.com

Although it was re-captured after about 12 hours, this incident caused a serious sensation in Tokyo and might have led to the slaughter of animals in 1943, including Hanako, a famous elephant from Siam.
Keywords: Minami Yoichiro, Hoeru Mitsurin, Frank Buck, Kobayashi Nobuhiko

1　はじめに　上野動物園黒豹脱走事件の衝撃

1936年7月25日朝、上野動物園の雌の黒豹が脱走したことが職員の知らせで発覚した。東京は号外がでるほどの騒ぎとなり、この名前のない黒豹は都民を震え上がらせた。翌日の朝日新聞夕刊は黒豹を「密林のギャング」になぞらえ、東京日日新聞は「帝都の猛獣狩り」が、まるで「ジャングル探検絵巻」になったと報道した。ただし、翌日の都新聞が「望郷の野に十四時間」と伝えるように、一日も経たないうちに黒豹は、現在の東京芸大にある暗渠の中で見つかり、生け捕りにされている。

しかし、闇夜に豹が潜んでいるのではと家で恐怖におびえたことが、特に子供たちには強烈な事件として記憶されたらしい。たとえば当時三歳だった作家の小林信彦(1932-)、は「黒豹昭和十一年」(1975)というエッセイで、戒厳令も二・二六事件も覚えていないが、この事件は克明に覚えていると回顧している。「帝都で猛獣狩」(p.8)と煽られ、脱走した黒豹が「悪鬼のように報道され」たおかげで、「自分の家の屋根の上、あるいは軒下に、黒豹が息をひそめている幻想に悩まされ、パニック状態におちいっていた」という。それが決して「極私的な体験でないことは、数年まえ、私がこの事件を小説の一部にとり入れたさいに、いわゆる昭和ひとけたと呼ばれる友人知己の数人から、すぐに葉書がきたことで分かる」と念押しして、中には「黒豹が上野の山で火あぶりされる悪夢まで見た」と書いてよこした一人も(p.12)いたと付け加えている。

小林のいう小説とはおそらく『大統領の密使』(1971)であろう。そこには「動物園の黒豹が夜中に檻の屋根の放射線状の部分から脱走したのだ。それがラジオで放送されたときのショックは大きかった。黒豹が東京のどこかにい

る！　この恐怖が分るか」(p.31)という一節がある。実際、衝撃と影響を与えたのは子供だけではなかった。早くも夏の段階で、2月の二・二六事件、5月末の阿部定事件と並ぶ1936年の三大事件と取りざたされたらしい。1936年の夏、新京で動物園を新設するというので満洲に出かけた上野動物園の古賀忠道は、黒豹脱走事件を「日本内地からの三大ニュース」として耳にしている（古賀, p.175）。続けて古賀は、この事件により罰棒五円を命じられたものの、翌年には主任技師ではなく正式な園長の辞令を受けたため、これも「黒豹のお蔭かもしれません」と追記している。当時、古賀は事実上の園長ではあったものの、役職としては都の公園課に準じる形となっていた。事件翌日の読売新聞には、生捕り記事の下に謝罪広告が掲載されているが、今後、このような事件が起きた場合に備え、都ではなく現場の責任者を明確化するということから、園長制度が導入された可能性は高い。

このように野生動物の管理制度と表象という双方の点で重要な問題を提起するにもかかわらず、この事件はほとんどといってよいほど研究されることがなかった。後述するように、この黒豹はもともとシャムから送られたものであり、この脱走事件は、同じくシャムから運ばれて戦時中に餓死させられた象の花子と実は無縁ではない。それでは、黒豹はどのようにして日本に送られ、その脱走事件はどのような衝撃を与えたのか、以下、順に見てみることにしたい。

2　暹羅経済使節団による黒豹の寄贈と南洋一郎の『吼える密林』

上野動物園へ黒豹が寄贈されたのは、1936年の5月18日、ちょうど阿部定事件が起きた日であった。「上野へまた珍客」と題して、翌日の読売新聞夕刊は写真とともに黒豹の到着を伝えた。いくつかの記事にもあるように、この黒豹は安川雄之助の寄贈によるものである。安川は、東京商工会議所が派遣する民間経済使節総勢14名の団長として、1936年3月末から1か月足らずシャムに滞在した。『訪暹経済使節報告書』にその詳細な旅程が記されており、3月30日にはチュラーロンコーン大学を視察したことなどもわかるが、黒豹入手

の経緯やそれを思わせる箇所は見られない。いずれにせよ、安川使節団は黒豹とともに帰国した。そもそも使節団は、シャムへの輸出超過という「片貿易」是正を目的としており、タイ米の輸入を提案するなどしたが、何らはかばかしい成果を手にすることはできなかった。「シャムに使して」ほかで安川が語るところによれば、投資という名の利権確保が目当てではないかと警戒され、歓迎はされたものの、実のある話や交渉はできなかったという。うまくあしらわれた安川はよっぽど腹にすえかねたらしく、その後、シャムの国情や国民性について侮辱的な言辞を振りまくことになる。ただ、安川使節団があまりに事前の情勢分析を欠いたまま、楽観的に見切り発車したことは否めない。当時、シャムは19世紀に締結した各国との不平等条約を撤廃する準備を進めていた。安川が帰国して約半年後の11月には、日暹通商条約廃棄が通告され、新条約が締結される。翌1937年には、欧米各国との不平等条約もみな撤廃されることになる。シャムが外交的な自立をかけて神経をとがらせていた時期に、日本を特別視して各国との交渉が不利になるような措置に応じるはずがなかったのである。安川使節団は、まさに矢田部保吉公使がこぼしたような、満洲国承認をめぐってシャムが棄権した行為を親日と過大評価し、シャムに群がった日本人一行の典型であった（吉村, p.72）。なお安川は三井物産の中興の祖として知られており、1934年に退職後、使節団を率いて後、その失敗にもかかわらず、1936年12月には東洋拓殖総裁に就任した。就任後もシャムを罵倒し続けたようで、その一節は矢野暢の『「南進」の系譜』(1975)でも当時の代表的なシャム観として引用されている。

したがって、黒豹は安川使節団の唯一ともいえる成果であった。ここで1920年代以降、欧米と同じく日本でも、猛獣狩りが特に少年憧れのスポーツとなっていたことは考え合わせなければならないだろう。とりわけ世に知らしめたのは徳川義親で、その『馬来の野に狩して』（1926）は、ジョホールのスルタン・イブラヒムの協力を得て行った狩猟を写真とともに詳しく紹介し、一躍、義親は「虎狩りの殿様」と渾名されることになった。徳川が狩りをした英領マレーはまた、アメリカのフランク・バックによるベストセラー『生け捕

りにしろ』(1930)や『ワイルド・カーゴ』(1932)といった実録風ハンティング小説の舞台でもあった。バックは、アジアで猛獣を生け捕りにして本国に送る様子を、演出たっぷりのドキュメンタリー映画として公開し、世界不況後にあって「偉大な白人ハンター」を体現する英雄となっていた(Doherty, p.243)。こうして内外で有名になったマレーでの狩猟を登場させ、さらに南方憧憬と一体化させることで、南進と狩猟を巧みに一致させたのが、南洋一郎の大ベストセラー『吼える密林』(1933)である。いみじくも小林信彦は、小説『大統領の密使』(1971)で「ぼくは、永いあいだ、この事件を、南洋一郎先生の名著に触れたあと、あるいは平行したころのことと思い込んでいた」(p.31)と登場人物に語らせており、黒豹の脱走は、『吼える密林』と融合する形で記憶されたことがうかがえる。これは小林自身の経験であったようで、「著名人幼少の読書」というアンケートのなかで小林は、「上野動物園の黒豹脱走事件(昭和11・7・24)が読書体験に関係があると私は信じている。『吼える密林』に始まる、南洋一郎の猛獣狩小説に熱狂したのは、もっとずっとあとだけれども」(p.50)と、黒豹におびえた経験が読書の傾向を決定づけたとさえ述べているのである。

それでは南洋一郎の『吼える密林』とはどのような小説なのであろうか。この小説への熱狂と黒豹事件の恐怖とが分かち難く結びついているとは、小林を含め昭和一桁生まれの男性が等しく回顧するところではあるが(橋本, pp.117-8)、今や『吼える密林』自体が、ほとんど忘れ去られたに等しい。そもそも語り手がアメリカ人フランクというのは、あきらかに前述のフランク・バックの小説を踏襲しており、それは忠実な現地の従者がアリというところまで同じである。ただ鈴木御水と樺島勝一による緻密な挿絵からは、主人公が外国人であることは強調されず、同時代の少年の理想化された姿としても読めるようになっている。写実的な挿絵と同様に、南洋一郎の小説も博物学的な記述が多く、『吼える密林』が南方への関心をかき立てたことは想像に難くない。しかし、一見、百科事典的には見えるものの、『吼える密林』が描く南方はむしろ幻想的な色彩が極めて強い。黒豹はボルネオでの狩りで登場するのだが、主人公たちが見ている前で獲物は、オランウータンに口から引き裂かれてしまう。そこで「土

人」たちの狩りにならって「大猩々」を捕まえることにするのだが、その方法とは、酒を飲ませて寝込んだところを生け捕るというものだった(pp.102-4)。これは、能などに登場する酒好きな「猩々」の伝説を転用したものであり、「土人」とはむしろ日本のことを指すといったほうがいいだろう。ほかにも人喰虎はともかくとしてマレー熊は、小型の熊であるにもかかわらず、巨大で凶暴な北方種のヒグマのように描かれ（これはインドを舞台にした『ジャングル・ブック』の挿絵や映画でも、熊がしばしば巨大化することと比較できよう）、さらにはボルネオの海岸では人を海に引きずり込もうとする巨大な蛸まで登場するなど、『吼える密林』に登場する南方は、リアルに描きこまれた幻想世界にほかならない。同書を愛読し、黒豹事件についても言及のある1928年生まれ澁澤龍彦が『高丘親王航海記』(1987)で描いたのは、まさに少年時代に幻視した南方を増幅させたものであることがよくわかる。

『吼える密林』がかき立てた猛獣狩りへの憧れと、シャムもまた無縁ではなかった。フランク・バックの人気映画に当て込むように、松竹は『シャム大野象狩』(1938)を山本弘之監督で製作しており、昭和10年代(1935-45)と思われる「ビルマ国境」か「マレー半島」では虎狩りを撮影した写真も残っている。所蔵する吉田千之輔によれば、1975年頃として、タイでも「骨董屋に行くと虎の皮（頭の剥製付き、ガラスの目玉入り）が1枚1〜2万バーツ（1バーツ15円の時代）で売って」いたという(p.78)。安川が黒豹を持ち帰った1936年は、ジョージ・オーウェルがシャムの隣国英領ビルマで、現地人の前で植民者としての面子を保つため暴れ象を射殺した経験を「象を撃つ」と題して発表した年である。政治状況は異なり、安川は現地の人々よりも自国民に対する沽券を考えた可能性が高い。とはいえ、シャムに対する比喩的な力の誇示と馴致を体現するものとして黒豹を持参したことは、同じ広義の植民地主義としての狩猟文化という範疇に属していることに違いはあるまい。

たとえば小林信彦は、猛獣狩りに憧れた少年時代を思い出しつつ、「私の猛獣狩は殺すのは目的ではなく、捕獲にあった－これは南洋一郎の猛獣狩小説を読みすぎたせいであろう－」と述べ、それが日本軍の南進と二重写しになっ

ていたことをはっきりと認めている(p.12)。小林はまた南洋一郎ばりに猛獣狩り小説を書いていたというが、そこに現地の人々はほとんど登場しないか、登場したとしても、現地協力者以上のものではないことは容易に想像できよう。これは小林の見識の不明を示すものではなく、猛獣狩りの物語が、少年たちに植民地主義を自然かつ熱狂的に受け入れさせる範型となっていた一例というべきだろう。事実、利害が対立する南とバックのあいだでは、まったく同じ物語が書かれていた。安川の黒豹も、狩りで生け捕りにしたかどうかは不明であろうと、その招来は同じ話型を反復するものといえよう。

急いで付け加えなければいけないが、黒豹はシャムから収奪され、日本の優位を傍証する象徴的な獲物というだけではないだろう。外向的優位を確認したい日本側の体面を見越したシャム政府が、黒豹を安川使節団に贈与することで、それを成果として体よく追い返したという可能性も否定できないからである。それはまた朝貢外交よろしく、訪問する異国の使節に珍奇な獣を下賜するという点で、シャム政府の体面も傷つけることがない。事実、黒豹の来歴が安川使節団による狩猟の成果なのか、シャム政府からの下賜なのか、どこにも明言がないことは、結果として両国政府の顔を立てることになっている。資料の裏付けはないので憶測の域を出ないが、もし下賜されたとすれば、徒手空拳で帰国できない立場を見すかされた安川としては、親善に水をささないよう感謝の礼をもって受け取るしかなく、また帰国後も、下賜されたといっては臣下として懐柔された印象を与えるため、あまり触れたくはなかったのかもしれない。

いずれにせよ、こうした動物の下賜は、明治の日本政府がシャムに最初に派遣した使節団から始まる。大鳥圭介を団長とする公的使節団も、外交的な成果はほとんどないままに帰国したのだが、その際、『暹羅紀行』(1875)によればチュラーロンコーン王より手長猿を贈られているのである（その後、持ち帰られたかどうかは不明）。手長猿についていえば、ちょうど安川使節団が渡暹していた頃である1936年の4月14日には、在日シャム公使が上野動物園に2頭の手長猿を寄贈しており、威厳ある黒豹と愛嬌ある手長猿という動物の寄贈には、巧みな外交手腕を連想させずにはおかない。象でも手長猿でもなく黒豹

というのは、敬意と親善を尊重しつつも毅然と謝絶したシャム政府の対応と重なり、安川使節団の規模と思惑に対する絶妙な返礼とも思われるからである。

3　シャムの動物寄贈外交と黒豹

動物寄贈外交といえば、中華人民共和国によるパンダ外交が連想されるが、近代国家においていち早く洗練させていたのは、たとえば象の寄贈に象徴されるシャムであった。日本との関連でいえば、1887年の国交締結を記念して、翌年の1888年には、雌雄の象がチュラーロンコーン王より寄贈されており、二頭はともに上野動物園で飼育された。もっともこの象はまさに英語の「白象」こと「持てあます厄介もの」となる。雌象は1893年には病死するのだが、雄象はおそらく適切な調教の知識が十分でなかったせいだろう、その後、暴れ象となって事故が相次ぎ、足を鎖につながれることとなった。『上野動物園百年史』資料編を見ると、20世紀に入って外国人旅行者などから抗議があり(pp.349-50)、1915年には問い合わせが多いため日英両言語で「兇暴ニシテ怒易キ性」について注意書きまで掲示された(p.355)。鎖で足が傷つき、狭い場所で不自由を強いられた上野動物園の象は、よく知られていたのである[1]。

---

[1] たとえば1921年に上京し、上野で国柱会の宣伝活動に参加していた宮澤賢治はその姿をどこかで見聞きし、「オッベルとぞう」(1926) に援用したのかもしれない。中島敦の「象の足に太き鎖見つ春の日に心重きはわれのみならず」(p.278)という歌も、おそらく同じ象を指すかと思われるが執筆の時期は不明であり、「ぬばたまの黒豹の毛もつやつやと春陽しみみに照りてゐにけり」や「思ひかね徘徊るらむぬば玉の黒豹いまだ独り身ならし」(p.272)という歌が脱走事件の後なのかどうかは不明である。なお象の虐待に抗議し、予算の半額負担を提示することで新象舎の建設を取り付けたのは、動物愛護運動も率先した仏教学者の高島米峰であるという。『高島米峰自叙伝』所収の岸邊福雄「米峰居士と上野動物園の象舎」(pp.41-3)。ただ1923年9月竣工予定の象舎は、震災で延期となってしまう（『上野動物園百年史』本編, p.96）。

国交記念として贈られたにもかかわらず、鎖につながれた雄象は、さらに殺処分される危機にも陥っている。1923年の関東大震災で猛獣が逃げ出すという流言が生まれ、都民の不安に対応した動物園がこれ幸いと「虎狩りの殿様」こと徳川義親に、懸案の象の射殺を依頼したのである。義親は子供の頃からなじみの象だけにきっぱりと謝絶し、自伝『最後の殿様』(1973)によれば、浅草の花屋敷に掛け合い、払い下げを取り付ける（『上野動物園百年史』本編, pp.96-7）。ただ、猛獣脱走の流言の影響は花屋敷にも及んでいた。震災後、多くの被災者が浅草の花屋敷に避難し、危険を避けて猛獣は射殺されたからである。このときの様子を洋画家の徳永柳洲が「花屋敷」と題して描いている。地震で建物が壊れ、火事が広がる花屋敷で人々が逃げまどうなか、後景では熊が発砲され、前景にはまさに人に撃たれようとしている檻の中の二頭の虎が描かれている。これは震災後の街の様子を描いた全24枚の一つであり、1929年に東京震災記念事業協会が購入し、1930年に完成した震災記念堂と復興記念堂で展示された。その後、長く行方がわからなくなっていたが、2010年に発見され、2014年8月13日の朝日新聞には、この「花屋敷」が掲載されている。

つまり、射殺を免れた雄象は、猛獣を殺処分した花屋敷に移送されたわけであり、当然ながらそこでもさして活躍することはなかった。結局、再び鎖につながれ、1932年には病死している。それはちょうど満洲が「建国」された年であった。翌1933年の国連総会でシャムが棄権し、そこから安川のような使節が派遣されることになったことを考えると、上野動物園の動物の来歴は、少なからず、こうした文化外交と関連していることが明らかとなろう[2]。事を荒立てず、親善と文化外交の成果として動物を寄贈するのは一貫しており、1935年には、シャムのボーイスカウトであるルークスアから日本のボーイスカウトの少年団へ雌象を贈られ、これが上野動物園で花子と命名される。国交締結を記念して贈った雄象を日本側がうまく飼い慣らせなかったことを受けて

---

[2] 義親の友人で『吼える密林』の舞台でもあるジョホールのスルタンであったイブラヒムも、しばしば動物を寄贈している。詳細は『上野動物園百年史』の資料編を参照。

だろう、象の花子と共に、3人の象遣いも来日した。『上野動物園百年史』資料編にある契約書によれば、Vidul Nobhakoon こと通称ヴィダルないしウィドラ、M. Chune Leukdi ことチュン、M. Ken. Yusukuh ことケン(pp.64-5)であり、当時、23歳のヴィダルはその後も上野動物園に留まって調教の進歩に大きく貢献しただけでなく(本編 p.482)、仙台、名古屋の動物園でも活躍し、そのまま日本人女性と結婚したらしい（村松,pp.202-3）。「ケン」と「チュン」という二人の象遣いの名前にしても、シャム公使から贈られた手長猿に付けられたという(福田,p.108)。つまり、1935年に贈られた象の花子と、1936年に今度は公使から寄贈された手長猿の「ケン」と「チュン」は、シャムという点でつながりあってとらえられたわけである。一方、安川が寄贈した黒豹は、あたかもその使節団の失敗を象徴するかのように、シャムの背景はさして言及されず、名前も付けられることがなかった。

このように義親の虎狩りと南洋一郎の小説『吼える密林』の人気により、猛獣狩りが南進論と重ねられるなか、黒豹は、安川による暹羅経済使節団の成果として上野動物園に寄贈され、脱走した。「帝都で猛獣狩り」という見出しは、こうした文脈の中で書かれ、事実、少年たちはその文脈で読みとったといえる。いみじくも『吼える密林』には、生け捕りにされた大猩々が檻から顔を出して脱走しそうになり、主人公の一行がパニック状態になる場面がある。実はこの場面はフランク・バックの『ワイルド・カーゴ』にある船上での黒豹の脱走を転用した可能性が高いのだが、黒豹の脱走と聞いて、『吼える密林』の一節を挿絵とともに想起した読者は多かったのではないだろうか。

その点で示唆に富むのは、大佛次郎の『狼少年』を連想したという、1929年生まれの秋山正美による回想である。秋山は、『動物園の昭和史』で黒豹脱走事件の時のことを回顧して、キプリングの『ジャングル・ブック』を翻案した『狼少年』に黒豹が登場することに触れている(秋山,p.79)。というのも、狼に育てられた主人公の少年がジャングルで生きていく際に、知恵や助言を授ける賢者として両者ともに黒豹が登場するからである。『狼少年』は『少年倶楽部』の1936年1月号から連載されたのでちょうど連載中に黒豹脱走事件が起

きており、キプリングの原作では、黒豹の「バギイラ」は檻に人間に閉じ込められたあと脱走したという設定になっているため、まさに物語と現実が並行して進行したことになるが、両者が交差することはなかった。管見の限りではあるが、大佛も事件について示唆するなり言及したりするようなことはなく、読者も注目することはなかったようなのである。『狼少年』や『ジャングル・ブック』に由来するような好意的な黒豹の表象は、こと日本に関する限り、例外にとどまっており、脱走事件の直接の影響かどうかはおくとしても、悪意や邪悪を体現することがほとんどといわざるを得ない[3]。

たしかに脱走事件を報じる新聞の記事は、たとえば小林信彦も「獰猛な黒豹」が「頑丈な鉄の檻を破って」といった大仰な表現に注目するように(p.10)、南洋一郎の小説を思わせる修辞が繰り返されていた。しかし、動物園の失態ということもあってだろう、黒豹脱走事件を文字通り「帝都の猛獣狩」として小説にした作品は、こと戦前に関する限り、見つけられていない。基本的に黒豹は、『吼える密林』が描いたようにジャングルの闇にひそんでハンターを驚かせる存在であった。南洋一郎自身、脱走事件以降、黒豹狩を繰り返し描き、戦後にはジャワでの和田民治の経験に基づく実録読物として『決死の猛獣狩』(1948)でも登場させているが、いずれも脱走事件に直接言及することはない。

4　黒豹脱走事件とその表象

---

[3] それは戦後も継承されており、たとえば手塚治虫(1928年生まれ)の漫画『ジャングル大帝』(1950-54)では、狡猾ながら間抜けな黒豹が、主人公の白いライオン一族と敵対する黒いライオンの子分として登場する（1965年のアニメ版ではトットという名で、原作よりも邪悪な存在として描かれる）。手塚は、おそらくバギーラを転用してアフリカ象の王の名をパグーラとしたのではないか。一方、横山光輝(1934年生まれ)の『バビル二世』(漫画1971-2・アニメ1973)で変幻自在に変身できる黒豹のロデムは、メンターとしての黒豹というバギーラの数少ない末裔かと思われる。

なるほど冒険小説での猛獣狩りが都会で現出したかのように、その生け捕りの様子を報じる記事は多かった。しかし、生け捕りはおよそ小説が美化するような猛獣狩りとはほどとおい泥臭い作業であった。上野の暗渠に潜んでいるところが見つかって後、盾のようなもので出口をふさいで黒豹を追い詰め、待ち伏せするマンホールに追い込むというもので、通称「トコロテン戦術」という間の抜けた名称からもうかがえるように、騒動を面白おかしく報道する記事はしばしば散見される[4]。筆頭は「杜のスタア述懐／“野性の憧憬じゃよ。風通しが悪いゾ！”」という7月27日付けの都新聞の記事だろう。これは脱走した黒豹の架空談話を掲載するもので、「園長には気の毒じゃった「二・二六」に刺激されたとか「戒厳令の解止を待っての」計画的行動とかそういう政治的理由による行動ではない、単なる「郷愁」じゃ、野性への憧れじゃ」と、脱走した黒豹は雌だったにもかかわらず、雄豹の言葉がもっともらしく説明されている。三大事件の筆頭である二・二六事件に言及があるように、何か禍々しいものが社会に飛び出し、世相を不安に陥れる隠喩として黒豹の脱走が人々の間で噂されたことは想像できよう。ただ検閲や発禁などの問題もあってのことだろう、当時の記録にそうした言及はほとんどない。数少ない一例は、作家の荒木巍の「動物園の黒豹」という小文である。そこで荒木は、「黒豹は、世界を襲った経済恐慌によってひき起こされた人間相喰み傷け合いながら倒れる修羅の現実と見るもよかろうしその間隙に踊り出たファッショの波と見てもよかろう」(p.134)と、法治主義がいわゆるジャングルの掟によって覆され、軍国主義がはびこってゆくことをそれとなく示唆している。

統御されていたはずの獣性が禍々しく解き放たれる隠喩として、檻からの動物の脱走を描くのは、つとにブラム・ストーカーが『ドラキュラ』(1897)で流

---

[4] 現場でいつどのように呼ばれたのかは不明ながら、文献でみる限り、おそらく最初に「トコロテン戦術」に言及したのは、1936年7月26日付けの朝日新聞である。

布させた手法である[5]。脱走した狼を追って、ロンドンの街で繰り広げられる猛獣狩りと連続して起こる怪事件は、吸血鬼と呼応し変容してゆく女性への性的嫌悪が巧みに重ねられている。おそらく少年時の記憶を転用したのであろう、1929年生まれの作家である都筑道夫が、同じ話型に黒豹脱走事件を援用している。その「黒豹脱走曲」(1973)は、黒豹が阿部定事件の当日に上野にやってきたことを導入とし、恋人が男を食い物にする魔性の女であることに黒豹脱走事件を契機にして気づくという短編である。1936年の三大事件の二つを結びつけたわけだが、そこには、米国映画の名作『キャット・ピープル』(1942)も着想を与えた可能性も考えられよう。これは男性とキスをすると豹に変身してその男性を噛み殺してしまうと信じる女性の物語であるが、豹への変身自体を描かないことで、すべてが彼女の妄想だったとも読める仕掛けになっている。一方、1981年にリメイクされた『キャット・ピープル』では、妄想ではなく、彼女は呪われたキャット・ピープル一族の末裔として描かれ、黒豹に変身した彼女は檻によって恋人と引き離されるという結末に作り替えられている。いずれにせよ、檻の中の豹が制御すべき欲望として描かれ、そこに『ドラキュラ』このかたの共通した女性嫌悪があるのは明らかだろう。

あわせて「黒豹脱走曲」と同工の短編が、山本周五郎によって書かれており、それもまた豹の脱走事件に取材した小説であったことについても触れておく必要があるだろう。1917年6月29日、神戸の須磨寺大遊園地から豹が脱走し、同時期に、猟奇殺人犯である「脳病院患者」の脱走も報じられ、神戸全市は大騒動となった。入江事件として知られる前者については、兵頭によれば、新聞報道から恣意的に犯人に仕上げられ、精神病患者は監禁すべき存在という図式が強固になったという。ここで注意すべきは、それが豹の脱走と重なったことであろう。元神戸市長の宮崎辰雄も自伝で回顧するように、両者は当時の人々

---

[5] たとえばウィリアム・アイリッシュの『黒いアリバイ』(1942)は、豹の脱走で不安が広がる南米の架空都市で猟奇殺人が立て続けに起こるというミステリーだが、同時にこうした『ドラキュラ』の主題も継承している。

によって野放しにされた獣としてとらえられていた(pp.18-19)。そうした不安を見透かすように、1917年7月16日付けの大阪毎日新聞には、脱走した入江が豹と遭遇して、架空の対話を繰り広げる記事が掲載されている。ちょうど都新聞が、脱走した黒豹の架空談話を掲載したことと比較できるだろう。豹はといえば、幾度も発見情報が寄せられるが確証は得られず、脱走から約三ヶ月半もたった10月13日になって、京都府船井郡和知村で発見され、射殺された。おそらく近代日本における猛獣の逃走では最長ともいえる期間にわたるが、新聞での騒動の割に物語に援用されることはほとんどなかったようだ[6]。世相も手伝ってのことかもしれない。たとえば姫路の料理屋で、「須磨で名所は須磨寺さまよ。豹が逃げますのそのそと」という都々逸を、内務官僚の長岡隆一郎は耳にしているが、同席していたのが縣忍兵庫県警本部長だっただけに気まずい思いをしながら苦笑したという（p.74）。時期は不明ながら、あまりに長期にわたる脱走ゆえに、こうした風刺の利いた文句が警察関係者のいる店でも歌われたというのは、この時代の姫路ならではといえよう。

そうしたなか、例外的に神戸の豹を取り込んだ作品こそが、事件当時、須磨に住んでいた山本周五郎による『豹』(1933)である。兄嫁の調査を父に命じられた弟が東京から須磨まで行くのだが、その時に豹の脱走騒ぎが起こり、不安になった兄嫁から誘惑ともとれるような接近を受ける。混乱する弟は、しかし、そのときすでに豹が捕まっていたことを知り、兄嫁は脱走にかこつけて、口塞ぎに自分を籠絡しようとしていたことに気づく。こうして弟は、彼女こそが「豹」だったと悟って、そのまま東京へ逃げ帰るのである。あたかも脱走からすぐに捕まったかのように事件を変更しているが、これが1933年という事

---

[6] これは欧米の例と比べてもかなり長い。たとえば1933年、チューリッヒ動物園から逃げ出した雌の黒豹は、市民を大いに動揺させたが、冬のスイスとはいえ期間はおよそ10週間である。この事件はヤン・マーテルの『パイの物語』(2001)第11章でも言及されているが、コナン・ドイルの『バスカヴィルの犬』(1901)のような伝説の魔獣の目撃譚を別とすれば、上野の黒豹脱走事件ほど影響を及ぼした脱走事件は皆無に等しい。

件から15年以上経っての発表であることからもうかがえるように、エロ・グロ・ナンセンスという1930年代の世相が色濃くにじみ出ている。

事実、上野動物園の黒豹脱走事件も、先に引用した都新聞の架空談話のように、開戦までのあいだはナンセンスの文脈で援用されることが多かった。最たる例が、事件の興奮がさめぬうちに急拵えで製作された松竹喜劇『黒豹脱走曲』(1936)である。斎藤寅次郎が監督し、渡辺篤が主演とのことだが、フィルムは見ることができず、現存するのかどうかも不明である。『日本の喜劇王―斎藤寅次郎自伝』(2005)と同時代の映画評にあるあらすじをみれば、物語は明治の新作落語である「動物園」をふまえていることがわかる。落語の動物園とは、人気の虎が死んでしまったので、着ぐるみを着て、虎のふりをしてくれればいいと聞いた男の話である。これは気楽な仕事と檻のなかでくつろぐが、まもなくライオンとの対決というショーが宣言され、男はあわてふためく。哀れにもライオンが虎姿の男にとびつき、もはやこれまでかと思った瞬間、実はライオンも雇われて人が着ぐるみを着ていたことが判明し、落ちとなる。映画『黒豹脱走曲』も、夏の暑さで豹が弱ってしまい、死なせてしまった動物園の飼育員から物語は始まる。飼育員の娘と結婚できるという約束をとりつけ、求婚者の男は豹に扮装して檻の中へ入るのだが、約束を反古にされ、檻を抜け出して東京はパニックになるのである。スチール写真をみると、なるほど着ぐるみ姿の豹の捕物帖を銀座で繰り広げたことがわかる。この写真とあらすじだけでも「寅次郎的ホーカムの凡々たる集成でつまらん！」(p.98)という『キネマ旬報』映画評は納得できよう。ただ、こうしたナンセンスな転用は演劇でも繰り返されたようだ。1938年、浅草国際劇場で村上浪六原作の『新装五人男』が上演された際、演出の高田保は、そこに動物園の場を追加して、似たような着ぐるみの黒豹を登場させているのである。1938年7月2日の読売新聞を見ると、脱走するのは黒豹だけでなくライオンや猿もいたようで、役者たちが檻の中で動物の扮装をして練習をする風景の写真が掲載されている[7]。したがっ

[7]『演芸画報』32(8) 1938のp.31にも同様の舞台写真がある。

て小林信彦の『大統領の密使』は、『黒豹脱走曲』のようなナンセンスなスラップスティック・コメディを継承しているともいえよう。同時に、その小林自身が事件そのものには恐怖していたことを考えれば、ナンセンスそのものの『黒豹脱走曲』も恐怖や不安の裏返しという側面があったのかもしれない。

一方、戦後になると、こうしたコミカルな援用は皆無となり、もっぱら二・二六事件による本格的な軍国主義の到来を示唆する逸話として黒豹脱走事件は言及されるようになる。代表的な例が、加賀乙彦の『永遠の都』シリーズのその名も『岐路』(1988)であろう。そこでは題名通り、運命の分かれ道として二・二六事件を中心に1936年の東京の世相が描かれ、その点景として黒豹が登場する。病院で「看護婦長」と「看護婦」が、「朝早く檻を破って脱走したと」という「ラジオのニュース」(p.234)を話題に出すのである。すぐに一人の看護婦が「何しろ獰猛なシャム生れの人喰い豹で、どこでどう襲い掛るかわからず、動物園は閉鎖して、ピストルを持った警官隊が出動して、それはもう大変な騒ぎらしいわ」と報道内容を見てきたように話し、さらにそれを引き取って薬剤師が「古賀園長の談話では、十日の間に鶏一羽しか食べず飢えてたんだって、それがこの暑さで興奮して、ついに檻を破っちまった」(p.235)とそれらしい説明を付け加える。『永遠の都』は、加賀とその一族と思しき一族の年代記であり、1929年生まれの加賀も不安そうにこんな周囲の会話を耳にしたのだろうか。衰弱した豹が獲物に飢えた人喰い豹へと改変されているのも、おそらく意図的な改変なのかもしれない。こんなふうにしてニュースを聞きかじりした人々が噂を広めていったことがまざまざと想像されるからである。そしてこのような噂が、戦時中の猛獣処分をもたらす一因となったのである。

5　黒豹脱走事件と戦時猛獣処分

黒豹脱走事件が猛獣処分の遠因ではないかと最初に推測したのは、おそらく作家の吉村昭である。1927年生まれの吉村は、小学4年生の時、住んでいた日暮里での「パニックに似た大騒動」(p.27)を『東京の下町』(1985)のなかで追

憶している。そして戦争が激化した頃、上野動物園で猛獣が薬殺され、象は注射針が折れたため、餓死させたということを後に聞いて暗然とするのだが、その「猛獣が空襲下に逃げ出したら大変だ、という説明に、黒ヒョウ騒ぎのことを思い出して、なるほど、と思った」(p.29)とその関連を示唆している。

この象の逸話は、土家由岐雄『かわいそうなぞう』(1951)や、藤子不二雄の『ドラえもん』にあるエピソード「ぞうとおじさん」(1973)などを通じて広く知られていよう。ただ両者にみられるような、軍部に命令されて殺処分を行ったというは、つとに『上野動物園百年史』でも否定されている。実のところ、すでに1941年8月の段階で、軍部の要請をうけて動物園非常処置要綱が作成されており、空襲の際には、動物の危険度に応じて動物園は動物を処分することを決めていたのである。冒頭で触れたように、上野動物園は、黒豹脱走事件以降、園長制度が正式に導入されており、都ではなく動物園に、直接の指示があったため、この文書が作成されたともいえる。そして1943年8月、いまのシンガポール市長を勤めたあとに、東京都長官となった大達茂雄が、処分の指示を上野動物園に出して猛獣処分が行われたのである。空襲が激化するのは翌1944年なので、大達が独自に判断したことになる。『上野動物園百年史』では、シンガポールで戦局の悪化を目の当たりにした大達が、のっぴきならぬ状況を覚悟させるため「国民に警告を発」したのではないかと、古賀忠道の回顧を引用しているが、資料の裏付けがあるわけではない(p.171)。

ここで注目したいのは、黒豹脱走事件以降、上野動物園が毎年行った猛獣捕獲訓練である。その1939年の訓練は、『上野動物園百年史』も記すように、「空襲により檻が破壊されて脱走した」という想定(p.152)であった。この訓練の詳細は不明ながら、都民は対策がすでに想定されていることに安心すると同時に、黒豹事件の際に家で震え上がった半日のことを連想させずにはいなかっただろう。動物園に空襲時の対策を指示した軍部も、どこかでこのことが脳裏をかすめたのではないか。興味深いことに、各種新聞を調査すると、軍が動物園に要綱の提出を求めて以降、空襲時における動物園の猛獣対策を扱う記事が散見されるようになる。早くも1941年7月18日付けの読売新聞夕刊で、理

研所員の白井俊明が英国の事例を紹介した「空襲下の動物」が現れるが、そこにはまだ猛獣についての言及はない。ところが動物園が軍部に要綱を提出した後、8月31日付けの同紙夕刊になると、「空襲と動物園－その対策はどうか－」と題して、あたかも動物園が実際に猛獣の処分が可能かどうかを確かめるかのような記事が書かれる。ドイツのライプツィヒでは、猛獣などが脱走した想定での実地演習で、銃殺も考慮していると紹介した後、「上野動物園でもやはりそれ位のことはしているだろうか。公務出張中の古賀園長に代る福岡園長代理に聴いて見た」として、その談話が掲載されている。それによれば、「防空演習で相当訓練されているから、いざ空襲となっても狼狽などしないから御安心下さい」として、「銃も毒薬もありますから間誤つくことはないが、猛獣共も代用食以来「温順（?）」になっています」というのである。さらに同紙の記者は念を押すようにして、福田三郎だけではなく、公務から帰った古賀忠道園長にも、1941年9月10日付けの夕刊で取材している。「空襲に猿狂乱」という記事で、ドイツのベルリン動物園で、英軍の空襲に騒ぐ猿を銃殺したという報道を引いて、「決して対岸の火事とはすましていられない」として古賀園長に談話を求めているのである。古賀園長は、象のジョン、トンキー、花子は、飛行機が上を飛び回ると警戒したが、いまは訓練の結果、灯火管制下でも高いびきで、「罠、それに非常手段用として銃も毒薬も用意されていますからチッとも心配は要りません」と太鼓判を押している[8]。

8　東京での黒豹事件と捕獲訓練だけが、空襲時の猛獣への不安を引き起こしたわけではもちろんないだろう。たとえば京都では、すでに1939年10月20日付けの京都日日新聞に、空襲があっても安全という京都市動物園の談話を報じる記事が見られる。『みんなの京都市動物園: 京都市動物園110周年記念誌』(2013),p.25を参照。京都市動物園で行われた猛獣処分のなかには豹もいて、洋画家の須田国太郎は、おそらく処分を知らされて後、京都市動物園で2月にスケッチして「黄豹」(1944)を完成させている。それからまもなく豹の雄は絞殺され、雌は高松へ移送された。ほぼ同時期、須田は勤務先の京都帝国大学での学徒出陣式の様子を「学徒出陣図」(1944)として描いており、両者は

たしかに軍部と行政が動物園に猛獣を処分させたことにはなるが、新聞社もまた、その必要性を煽った可能性は否定できない。事実、そのように処分された動物を美談に仕立て上げたのもまた新聞であった。1943年の夏に上野動物園を皮切りに猛獣処分が始まると、1943年9月3日付けの読売新聞では、「”雄姿”皮に残して」と「時局に殉じた猛獣の慰霊祭」の記事が掲載され、1944年5月12日付けの同紙では、動物たちの「決戦生活」が宣伝のように語られる。河馬は「大喰らいなもんで」申し訳ないが、気は小さいので「お怪我させるような真似はいたしません」と語り、麒麟は「私たちの王様、獅子や虎さんのことを思えば、贅沢はいえません」と述べるのである。なお、この河馬は1945年に処分されるが、麒麟は戦後まで生き延びて人気者となる（『上野動物園百年史』, p.194）。むろん、報道のみに煽動されたわけではあるまい。そこには関東大震災時の流言と猛獣処分はなんらかの形で影を落とし、また黒豹脱走事件の時に過ごした恐怖も手伝ってのことであるだろう。当の黒豹は、こうした動物園の猛獣への視点が大きく変わるなか、1940年5月12日、最後まで名はないままに病死し、薬殺自体は免れることとなった。

おわりに　黒豹脱走事件にみる日タイの交錯

これまで見てきたように1936年の上野公園黒豹脱走事件は帝都を震撼させた。事件に言及するエッセイは、小林信彦はじめ幼少時の記憶に強く焼き付いたであろう昭和一桁世代にしばしば見られる。そこには事件の衝撃もさることながら、南洋一郎の『吼える密林』の流行に見られた南方での猛獣狩りが、帝

『1945年±5年』(2016)展図録に並べて掲載されている。両者とも、重い足取りで歩む陰鬱な筆致は共通しており、意図は明白といえるだろう。上野の黒豹は、脱走事件に取材してか松村五郎の「黒豹」(1937)のほかは、そのような絵画をみつけられていない。『美の國』1937年5月号口絵を参照。

都で実現してしまったという側面も相乗効果をもたらしていた。事実、『吼える密林』には黒豹が登場しており、檻から逃げ出す大猩々という場面もあった。

そもそも逃げ出した黒豹は、安川雄之介を団長とする暹羅経済派遣使節が持ち帰り、上野動物園に寄贈したものである。満洲問題をめぐる国連決議以降、シャムと日本は特別な関係にあると誤解し、不平等条約の撤廃に向けて準備を進めていたシャムの事情を考慮していなかった使節団は、当然ながら失敗に終わり、黒豹はその唯一の成果となった。狩猟による獲得か政府による下賜なのか、入手の経緯は当時から説明がなく不明であるが、黒豹は、すれ違いつつも親善は確保しておきたい日暹双方の立場と体面を守る格好の存在ということができる。南洋一郎が広めた猛獣狩りに南進論を重ねる当時の植民地主義的な狩猟文化の文脈からみれば、黒豹は、今後のさらなる「獲物」を予感させる凱旋を示唆したであろうし、日本の開国以来、親善の印として動物を寄贈してきたシャムの立場からみれば、手長猿でも象でもない黒豹は、招かれざる客への毅然とした態度を表明しているように受け取れるからである。

いずれにせよ、脱走事件をめぐる当時の報道では、捕獲作業自体はおよそ猛獣狩りとはいえないものだったが、南洋一郎を思わせる修辞を使用している記事が多々見られた。すでに一九三六年の段階で、二・二六事件、阿部定事件と並ぶその年の三大事件として有名となったものの、同時代においては、検閲もあってのことだろう、軍国主義の幕開けを示唆するような言及はほとんど見られず、映画『黒豹脱走曲』や『新装五人男』の脚色のように、着ぐるみの黒豹が脱走するという落語「動物園」の延長で登場する喜劇的な表象が多かった。二・二六事件や阿部定事件と結びつけられるようになったのは、戦後のことである。前者の代表としては、軍部の独走という禍々しいファシズム体制が社会を覆う二・二六事件の象徴として黒豹の脱走を描く加賀乙彦の『岐路』があり、後者では、檻を破った黒豹に野性の解放や情念の暴走を重ね、男性を猟奇的に消費する物語の隠喩として言及した都築道彦の「黒豹脱走曲」が挙げられる。

間接的な影響としては、戦時中の猛獣処分がある。猛獣処分はおよそ軍人や内務官僚といった特定の部署による命令というだけでは説明できない。黒豹の

脱走直後に、上野動物園は猛獣捕獲の訓練を実施しており、3年後の1939年には、空襲で壊れた檻から逃げ出した設定で行うなど、そこから軍部が動物園に非常時の動物処分について要綱を作成させ、それを確認するかのように、新聞では欧州の例をひきながら、脱走時の猛獣対策について動物園に取材した記事を掲載している。看過されがちなことではあるが、すでに関東大震災の時点で、猛獣が逃げ出したという流言があり、浅草の花やしきが猛獣を射殺し、その場面を描いた絵が東京には展示されていた。こうした複合的な原因の一つとして黒豹脱走事件が考えられるのだが、こうした猛獣処分に同じくシャムの動物が関係していたことはこれまで見落とされてきた。国交締結を記念して上野動物園に贈られた雄象は、震災を期に射殺されるところを義親に救われるも花やしきに下賜されて病死し、それからまもなく、シャムから贈られた象の花子は、戦時の猛獣処分で殺されたからである。

ただ黒豹の出自は、脱走事件の当時から言及されることはほとんどなかった。脱走の翌1937年に、シャムが列強各国との不平等条約を撤廃したことを考えれば、黒豹の脱出は、猛獣狩りというような日本の南方幻想がほころびかけたことをいみじくも象徴していたともいえるだろう。しかし、こうした関係が注目されることはなかった。日本の思惑とシャム自身とが大きくずれていったことへの無関心と無知が、それだけ大きかったということなのだろうか。

実際、脱走事件に言及した小説でもシャム由来なことを注記しているのは、加賀の『岐路』のほかは、森まゆみの「谷中おぼろ町」(1998)くらいしかない。谷中の地域誌を長く編集した森らしいく、そこには当時を知る人々の聞き取りのように生き生きした会話が書き込まれており、「あいつは癖が悪かった、十日いて鶏一羽しか食わん、飢えてるから気が立ってるゾなんて、それこそ町の人が聞いたらこわがっちまうような話でした」と、『岐路』と同じ噂が再現されている。そして、以下のように事件を要約するせりふが書き込まれる。

「そのころ、どうかすると風の向きで、上野動物園の猛獣の吠える声が聞こえたもんですが、七月二十四日の夜中に、シャムから、っていまの

タイですけど、贈られたばかりの黒豹が脱走したんです。野生の獰猛なのが。速くからよその国に連れてこられて豹も迷惑だわよねえ。」(p.228)

たしかに黒豹にすれば迷惑千万だったことだろう。しかし、前述のように、タイから連れてこられて辛酸をなめた動物は黒豹だけではなかった。その点で興味深いのは、猛獣の声が普段から聞こえており、それだけに事件がわかるや、みな雨戸を閉めて家に閉じこもったというところであろう。この猛獣の声という一節が、漱石の『吾輩は猫である』(1906)の寒月の逸話を思わせるからである。寒月は、猫の主人を訪ねて、夜中に「上野へ行って虎の鳴き声を聞こう」と誘う場面がある(p.467)。つまり、暗闇の公園で虎の声を聞けば、およそ都会にいることを忘れて、奥深い森林に迷い込んだような冒険を味わえるというのだ。いわば、この冒険を約30年後に実現したのが、黒豹脱走事件といえるだろう。そして事件後に実施された猛獣捕獲訓練は、時期を2月頃に変えていまも「猛獣脱出対策訓練」として上野動物園を中心に行われている。およそ猛獣には見えない着ぐるみの動物をまじめに捕らえる姿は、しばしば風物詩として時のニュースの埋め草として登場する。しかし、この事件が黒豹脱走事件に由来し、そのナンセンスにも見える光景は、1936年の映画『黒豹脱走曲』を期せずして継承していることは、ほとんど触れられることがないのである。

本稿は大阪大学・未来知創造プログラム「日タイ文化交流史の研究」および科研費・基盤（C）「20世紀前半における英国黄禍論小説と日本のアジア主義小説の比較文学的研究」（研究代表者橋本順光）の成果の一部である。

＜参考文献＞

秋山正美(1995)『動物園の昭和史』データハウス
荒木巍(1936)「動物園の黒豹」『人民文庫』9月号
『キネマ旬報』(1936)587号(9月11日号)

加賀乙彦(1997)『永遠の都ー岐路』新潮社
古賀忠道(1966)「動物園長三十年」『動物夜話』雪華社
小林信彦(1976)「黒豹昭和十一年」『東京のドン・キホーテ』晶文社
小林信彦(1971)『大統領の密使』早川書房
高島米峰(1950)『高島米峰自叙伝』学風書院
東京都恩賜上野動物園編(1982)『上野動物園百年史』本編・資料編、東京都恩賜上野動物園
長岡隆一郎(1939)『官僚二十五年』中央公論社
中島敦(2001)『中島敦全集』2巻、筑摩書房
夏目漱石(1993)『夏目漱石全集』1巻、岩波書店
橋本順光(2015)「山田長政の秘宝譚―『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで―」『日本研究』11号
兵頭晶子(2008)『精神病の日本近代：憑く心身から病む心身へ』青弓社
福田三郎(1968)『実録上野動物園』毎日新聞社
訪暹経済使節団編(1936)『訪暹経済使節報告書』訪暹経済使節団
宮崎辰雄(1993)『神戸を創る：港都五十年の都市経営』河出書房新社
村松竹太郎(1943)『東京都政秘話』秀文閣書房
森まゆみ(1999)「谷中おぼろ町」『恋する男たち』朝日新聞社
八木福次郎(1991)「著名人幼少の読書」『古本便利帖』東京堂出版
安川雄之助(1936)「シヤムに使して」『実業の日本』39(13)
吉田千之輔(2009)「フォトサロン神保町ータイの動物」『タイ国情報』43(2)
吉村昭(1985)『東京の下町』文藝春秋
吉村道男(2002)「駐在国公使報告等にみる一九三五年前後の日本・タイ国関係の一面」『外交史料館報』16号
Buck, Frank, (1930). *Bring'Em Back Alive*. NY: Simon and Schuster.
Buck, Frank, (1932). *Wild Cargo*. NY: Simon and Schuster.
Doherty, Thomas (1999). *Pre-code Hollywood*. NY: Columbia U.P.